様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　30　日現在

機関番号：　１１１０１
研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2009～2011
課題番号：　２１５２０６６０
研究課題名（和文）森林・鉱物資源の開発・活用から見た世界遺産白神山地の変容

研究課題名（英文）　Changes in the World Heritage Site of Shirakami-Sanchi: From the Perspective of Development and Usage of Forest and Mineral Resources

研究代表者
長谷川　成一　（HASEGAWA SEIICHI）
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：20013287

研究成果の概要（和文）：1993年に世界自然遺産に登録された白神山地は、豊かな森林・鉱物資源を持つ地域であった。本研究では、歴史資料の調査・分析を通じて、山地の資源を歴史的にいかに活用してきたのかを解明した。その結果、ブナの原生林に代表される「手つかずの自然」ではなく、白神山地は山の民の共生と交流の場であったことを明らかにした。18～19世紀にかけては、弘前藩による採掘と伐採が進み、資源の枯渇に悩むことにもなった。

研究成果の概要（英文）：Shirakami-Sanchi, registered as a UNESCO World Heritage Site in 1993, is a region which has held abundant resources of forest and minerals. This study elucidates how this region’s resources have been used historically, based on the survey and analysis of historical documents. As a result, it has been discovered that Shirakami-Sanchi is not “untouched nature” as its virgin beech forests are often described to be, but rather a place where mountain inhabitants lived together and interacted. From the 18th through 19th centuries, Hirosaki domain increasingly carried out mining and logging in this area, and they even faced the problem of resource depletion.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：白神山地・世界遺産・ブナ林・流木・鉱山・西目屋・弘前藩

１．研究開始当初の背景

1993年、世界遺産（自然遺産）に指定された白神山地は、ブナの原生林に代表される「手つかずの自然が残る」世界遺産というキャッチフレーズのもとに、歴史的な実態がほとんど未解明の状態であった。そのため、歴史資料の発掘はもとより、豊かな森林・鉱物資源に恵まれた白神山地といった視点は、全く欠落した状況であったことから、本格的な歴史研究、人と自然との深い関わりを持つ山地という観点から

のアプローチがなされないままであった。
　豊かな資源に関わって生業を営んできた人々に関する分析は、わずかに「マタギ」の人々が民俗学・社会学から取り上げられてはいたものの、白神山地に暮らす大多数の人々の生活・生業史や、秋田領と津軽領の、林業や鉱業に従事する、同山地を媒介とした交流史が存在したことはほとんど等閑に付されていた。

２．研究の目的
　本研究では、次の事柄を明らかにすることを目的とした。
（1）藩政期の津軽領側で、白神山地の資源はいかに活用されたか。
①津軽領では流木（ながしぎ＝薪材）が、弘前城下を始め津軽平野の人口密集地帯の生活燃料として使用された。なかでも白神山地で伐採された薪材は、岩木川に川流しされて各地で使用された。18世紀には、鉱山の製錬用薪炭としても活用され、資源の活用が飛躍的に進んだ。そのようななかで津軽領側の白神山地での利用形態は、どのように展開し変化したのかを、解明すること。
②18世紀前半から後半にかけて津軽領の銅鉛生産は最大量に達するが、白神山地所在の尾太鉱山をはじめとする鉱山の稼行実態はどうであったのかを解明すること。
（2）藩政期の秋田領側で、白神山地の資源はいかに活用されたか。
①秋田藩の林政の分析を軸に据えて、白神山地とその周辺地域における森林資源開発･活用の歴史を解明し、さらにそのことを通じて秋田県側白神山地の現在の植生の成り立ちや白神山地と地域の人々の関わり合いを明らかにすること。
②秋田領側白神山地とその周辺地域の鉱物資源も近世期から開発･活用されてきたが、八森銀山や太良鉛山の鉱山経営や稼行の実態は未だ明らかにされているとは言い難いため、その実態を解明し、秋田藩政や地域の人々との関わりを明らかにすること。
（3）近代に入ってからの白神山地の資源は、いかに活用されたか。
近世の同山地の開発のあり方と近代のそれは、管理主体の変更に伴って決定的に相違した。近代国家の立場から同山地の開発はいかなる構想のもとに展開したのか、その実態を明確にすること。

３．研究の方法
（1）本研究は、日本近世・近代史の立場から、白神山地に関して林業史、鉱山史、環境史の分野に重点を置いた資料調査と収集を各機関にて実施する。
（2）絵図と沢台帳を中心に弘前藩と青森県側の資史料は研究代表者の長谷川が、秋田藩と秋田県側の資史料は、脇野（連携研究者）が調査・収集にあたり、両県外の資史料については、両名が協力して調査と収集を実施した。
(3)白神山地の自然遺産としての特徴を浮き彫りにするためにも、白神とともに屋久島・知床のフィールドワークを行い、最終年度には、韓国の世界自然遺産である済州島とソウルの各国立博物館において世界自然遺産の比較研究を実施して、相違点と類似点を明らかにした。

４．研究成果
（1）研究代表者の長谷川の研究成果は、以下の通りである。
①近世津軽領を素材として、新たな絵図の解析と同藩の森林台帳・沢絵図の分析から、近世津軽領の林政・森林経営を探る上で基本的な研究素材となる領内の植生を復元し、17世紀から18世紀にかけての約100年間にわたる植生景観の変容について考察した。
　「津軽国図」によって復元した17世紀末の領内植生から、津軽領では、斫伐が比較的やりやすく、岩木川などを活用した、材木の大消費地である都市

や港湾へ運搬の利便性の高い山地に開発の集中する傾向があった、と言えよう。寛政期津軽領の植生復元図によると、18世紀後半から末にかけての津軽領における植生景観は、17世紀末の「津軽国図」に見られたそれと比較して、大きな変化は認められない。ただし、いくつかの地点で明らかに檜・杉の森林が消滅した形跡はあり、開発の手は次第に奥山に延伸していったと推定される。津軽半島の陸奥湾に面した山々や八甲田の南部境、碇ヶ関の秋田境など、市場において高価格での販売が可能な、檜・杉など高質の針葉樹の伐採可能な地域は、過伐→荒廃→休山のサイクルを繰り返す状況にあったようだ。

弘前藩では、天明飢饉を契機として、領内にかつてないほどの広範な御救山の設定がなされた。御救山が森林資源の枯渇を誘発したことから、18世紀末に至って、弘前藩では、領内山林に大幅な手を加える余力はすでに尽きており、森林景観を変更するような政策自体を打ち出せなかったと考えられる。秋田藩のように森林資源の枯渇を防ぐために、積極的に植林を実施させた形跡は、弘前藩には認められない。弘前藩では、藩庁の手による植林によって山勢回復を図ることなく、天然更新による森林資源の回復を待つ方策だったことから、17世紀末から18世紀末にいたる約百年間の植生には、劇的な変容は認められなかったのである。

②1993年、屋久島とともに世界自然遺産に登録された白神山地は、秋田・青森両県にまたがるブナの原生林、斧を知らない森林景観として多くの人々が訪れ、原初的かつ豊かな自然を色濃く残す山地として広く知られている。

江戸時代の白神山地にあって、同山地の森林資源がどのように活用され、資源保護はいかなる形でなされたのか、その歴史を解明することを目的としている。近世津軽領において、流木（ながしぎ）と称された薪材は、白神山地西部の海岸地帯では製塩用の燃料に、東部の目屋野沢（めやのざわ）においては近世都市弘前の日常燃料として、同山地から岩木川などの河川を経由して供給された。18世紀前半、津軽領において流木が行われた山沢は362に及び、当時にあっても流木山の伐り尽くしという事態が次第に進行していたのである。

寛政7年（1795）、弘前藩によって目屋野沢は弘前に流木を供給する備山として公的に位置づけられ、薪材の伐採は「十カ年廻伐」という輪伐のルールが規定され、森林資源の保護が打ち出された。しかし、毎年15万本という流木量を確保するのは、当時の山役人にとっても困難なことであった。目屋野沢における白神山地の森林資源は、流木のほかに尾太（おっぷ）銅鉛山などの製錬に用いられる、鉱業用燃料としても不可欠であった。

18世紀末にいたって、尾太鉱山は稼行を停止したが、その後も流木の生産は継続されたことから、伐り出す流木山は次第に奥山へと移行し、森林資源の保護を目的とした輪伐のルールは名目となり資源の枯渇は一層進むことになった。さらに、津軽領流木山の保護に欠落していたのは、伐採後は植林をせずに、資源の回復を天然更新に任せてしまったことであった。したがって流木の調達は藩が構想したようには展開せず、藩領全体の森林資源の枯渇が進む中で、保護策も空しく目屋野沢の森林資源の枯渇は進んだと考えられる。

③弘前藩の御用達商人であった足羽次

郎三郎は、近世中期に活躍した新興問屋商人群のなかの一人として大変興味深い人物であった。大坂の住友泉屋をはじめとする大坂銅吹屋仲間との交際だけでなく、津軽領白神山地の鉱山である濁沢銅山ついで尾太銅鉛山の接収事件などを通じた、江戸幕府勘定奉行など政権要路者や銀座銅方役人への接近など、藩領鉱山の山師ないし銅鉛販売人というスケールは、とっくに越えた、活躍をしたことを明らかにした。さらに新興問屋商人として、藩領の枠組みにとらわれず、当該時期の全国市場・領域市場に対処することを目論む、飛騨屋に代表される新たなタイプの人物像として把握することが可能であろう。大坂・江戸・津軽と活躍の範囲は広域であり、さらには飛騨屋のネットワークに入り込もうとする意欲も見せており、恐らく当時の津軽の民衆は、「飾町人」という認識を越えて次郎三郎を理解することはできなかったのであろう。ここに彼の人物像のおもしろさがあり、弘前藩の宝暦改革のなかで民衆の怨嗟が乳井よりも足羽親子に集中したのは、得体の知れない人物としての足羽に対する恐れであったとも言えよう。

（2）連携研究者の脇野博の研究成果は、以下の通りである。

①近世の白神山地の研究について

これまで、近世の白神山地の歴史に関する研究はほぼ皆無であった。それゆえ、「歴史上、白神山地が初めて記述に現れるのは1783年から1829年にかけて書かれた菅江真澄の日記『菅江真澄遊覧記』である。」というようなことが言われてきた。

こうしたなかで、近世の白神山地の秋田藩の林政上の主な出来事の年表を次に示した。

㋐文禄・慶長期（16世紀末）　伏見城作事用材の杉大板出材（秋田氏など）

㋑慶長７年（1602）以後　江戸城増築用材や上方への出材など（佐竹氏）

㋒寛文期（1661～72）森林資源枯渇のため、留山制度など林野利用の規制を強化

㋓元禄15年（1702）　林役を設置し、上筋（雄勝・平鹿・仙北）の山林調査を行う

㋔宝永３年（1706）　能代川上地方の山林調査を行う

㋕正徳２年（1712）　第１期林政改革（農民への植林奨励、成果あがらず）

㋖宝暦11年（1761）　第２期林政改革（新林育成、杉・檜植林、薪炭材保護、野火焼の注意等、成果あがらず）

㋗文化期（1804～17）第３期林政改革（文化の林政改革、賀藤清右衛門景林の活躍）

・六郡木山の管轄が郡奉行から木山方へ、

・山林台帳を整備し、山林区分を確立

・植林の分収を三公七民にする、

・材木の伐採は村請をやめ、藩直営にする

文禄・慶長期（16世紀末）、全国を統一した豊臣秀吉は、伏見城作事用材として大きく立派な秋田杉材に注目し、領主である秋田氏らに命じて秋田杉材を献上させた。

寛文期（1661～72）、藩政初期からの乱伐により森林資源が減少したため、留山制度など林野利用の規制を強化し、早くから伐採禁止の措置がとられた。

文化期（1804～1818年）の改革では、勘定奉行と木山方が領内山林を支配する、山林台帳を整備して山林の種類を明確にする、藩と農民で植林した木の分け前の分配率を藩30％農民70%にするなど、山林政策の抜本的改革が行われ、秋田杉の保護・保存に貢献した。

②近代の国有林経営と白神山地　秋田国有林における明治40年（1907）「秋田大林区荷上場小林区大開事業区簡易施業按説明書」には、当時の真瀬山周辺の樹種について、杉の雑木の割合は「杉　五十九万六千二十八尺〆、雑木　四十一万一千百尺〆、計　百万七千百二十八尺〆」とあり、杉と雑木の割合は6対4であり、杉の割合が高かった。また、「林相ヲ見ルニ、杉純林、杉雑混淆林及雑木林ノ三ツヲ以テ形成セラレ、前二者殆ンド其多ヲ占ム。狼之介沢下流粕毛川ノ東側ハ杉純林ニシテ、前述ノ如ク地勢急峻ナラズ、林木ノ生長頗ル可アルヲ見ル。殊ニ大開沢ヲ以テ最ナリトス。右ニ沿ッテ上流即チ狼之介沢以北小倉沢ニ至ル迄ハ、杉八分、雑木二分ノ混淆林ニシテ、雑木ハ主トシテ巨大ナル山毛欅（ぶな）ナリ。内川ノ北側及粕毛川本流ノ西側ハ、何レモ山毛欅ノ中ニ杉ノ点在セハ、一帯ノ雑木林ニシテ」と記されていることから、雑木は主としてブナであった。

以上のように、秋田県側の白神山地の森林は近世前期以降、杉と広葉樹である雑木の混淆林であった。杉は秋田藩の材木生産の中核樹種であり、近世初頭から盛んに伐採されてきたことから、白神山地においても杉の伐採が行われてきたと考えられる。他方、秋田藩では雑木は主として薪炭として盛んに利用されてきたことから、白神山地の雑木も薪炭材として伐採されてきたと考えられる。したがって、近代の国有林での杉とブナを主とする雑木からなる森林は、こうした近世期の森林利用の結果として出来上がったものであるといえよう。それゆえ、現在の秋田県側の白神山地のブナ林は、近世期以来の当該森林における森林利用が生み出したものであった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）
①長谷川　成一　一八世紀新興問屋商人の広域的活動とネットワークー津軽領・足羽次郎三郎の活躍ー、一八世紀日本の文化状況と国際環境、思文閣出版、査読有、2011、193-213、
②脇野　博　一九世紀秋田藩林政と近代の秋田杉、徳川林政史研究所紀要、45巻、査読無、2011、161-169
③長谷川　成一　世界遺産白神山地における森林資源の歴史的活用－流木山の研究－、弘前大学大学院地域社会研究科年報、№７、査読無、2010、1-33、
④長谷川　成一　藩領における植生景観の復元とその変容－近世津軽領を中心に－、弘前大学大学院地域社会研究科年報、№６、査読無、2009、1-63、

〔学会発表〕（計3件）
①脇野　博、日本前近代の森林資源開発と日本人の自然、環境史学会、2011年12月17日、東京大学農学部
②長谷川　成一、済州世界自然遺産と「耽羅巡歴図」、弘前大学国史研究会、2011年12月10日、弘前大学
③脇野　博、絵図から見た近世白神山地の植生と林野利用、環境史学会、2010年12月18日、東京大学農学部

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
長谷川　成一（HASEGAWA SEIICHI）
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：20013287

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
脇野 博（WAKINO HIROSHI）
秋田工業高等専門学校・人文科学系・教授
研究者番号：80220846